

Rad51 Expression Is a Useful Predictive Factor for the Efficacy of Neoadjuvant Chemoradiotherapy in Squamous Cell Carcinoma of the Esophagus

中ノ子, 智徳

<https://hdl.handle.net/2324/1441094>

出版情報：九州大学, 2013, 博士（医学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）



論文審査の結果の要旨

背景：扁平上皮食道癌（以下 ESCC: Esophageal Squamous Cell Carcinoma）に対する術前化学放射線療法（以下 NACRT: NeoAdjuvant ChemoRadioTherapy）において、病理学的完全奏効を得た場合はより治療効果が得られる。また、Rad62 発現は多くの癌腫において化学療法や放射線療法の治療効果に影響することが知られているが、食道癌における Rad51 の役割は明確でない。

資料と方法：まず、術前治療を行わずに食道切除を行った 89 症例（以下、non-NACRT 群：non-NeoAdjuvant Chemo-RadioTherapy）について、切除標本における Rad51 発現状況を調査した。また Rad51 発現と臨床病理学的因子の関連について調査した。つぎに、術前化学放射線療法を予定している 39 例において（以下、NACRT 群：NeoAdjuvant Chemo-RadioTherapy）、術前治療施行前の食道癌生検標本を用いて Rad51 発現状況を調査し、術前化学放射線療法の奏効度合いと比較することで、術前化学放射線療法感受性へ Rad51 発現が与える影響に関して調査した。

結果：non-NACRT 群において、リンパ節転移は Rad51 発現陽性例で多く認められた（Rad51 陽性例：58.5% vs Rad51 陰性例：30.6%, $P=0.0168$ ）。疾患特異的死亡率は Rad51 陽性例で高率であった（5 年生存率：71.8% vs 44.7%, $P=0.0261$ ）。NACRT 群において、術前化学放射線療法で完全奏効が得られた症例は Rad51 発現陰性例が多かった（68.8% vs 46.5%, $P=0.0171$ ）

結論：食道扁平上皮癌症例において、Rad51 発現はリンパ節転移と予後に影響する因子である。また、術前治療前の食道扁平上皮癌生検標本において、Rad51 発現状況は術前化学放射線療法の効果予測因子となりうる。

以上の成績はこの方面の研究に知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験は、まず論文の研究目的、方法、実験成績などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったがいずれについても適切な回答を得た。

よって調査委員合議の結果、試験は合格とした。